

序：
前近代の北西ユーラシア 越境研究と史料研究

小澤 実

9本の実証論文を軸に据えた本報告書の目的は、「ロシア外部の史料を通じてみた前近代ロシア世界」という副題から了解されるように、「前近代ロシア世界」の歴史学的解明にある。それゆえに全体としてはロシア史の個別論文集成と理解して差し支えないし、いずれの論文もロシア史の解明に寄与する内容である。しかしながら報告書の主題では「ロシア」とせずに、「北西ユーラシア歴史空間」という表現を用いた。これにはもちろん理由がある。前近代ロシア世界とは、端的に言えばロシア国家の支配圏の及ぶ世界である。時間的には、9世紀のリューリク朝キエフ・ルーシの成立以来、モスクワ国家の成立、そして1613年のロマノフ朝成立をへて1917年の革命によるソビエト政権の成立までのおよそ千年間を、空間的には、このロシア国家が展開した地域、つまり西をバルト海、東をウラル山脈、南を黒海で囲まれた地域を指す。この前近代ロシア世界をめぐるのは、ロシア本国はもとより、欧米においてもまたここ日本においても汗牛充棟の研究の蓄積があり、現時点ではすべてに眼を通すことなど不可能な状況に至っている。それはとりもなおさずロシアに対する関心の高さや研究水準の高さを反映していると言えるだろう。

しかしながら私たちが眼にする古典的記述の多くは、前近代のロシア世界の歴史を、先ほど述べた自然境界とロシア語という言語境界でその周辺地域から分かつ内的発展史として捉える傾向があった、といえは言いすぎだろうか。もちろん従来の研究が、外部からの影響を無視することで成り立っていたわけではない。外交史や文化受容史といった分野はすでに確立し独立した研究分野となっていることはいまさら指摘するまでもない。しかしながら、ロシア国家の起源をめぐるノルマニスト・スラビスト論争や、モンゴル帝国の影響を負うものと見なす「タタールのくびき」という理解が、長らくロシア史のヒストリオグラフィに影を落としていたこともまた否定することはできない。その背景には、「スラブ人の、スラブ人による、スラブ人のためのロシア」という理解が横たわっていたのではないかとの推測は、はたしてロシアの専門家ならざる者の思い込みに過ぎないのだろうか。

ここで「北西ユーラシア世界」という表現に立ち戻ってみたい。前近代のロシアは当初キエフ、その後モスクワを中心とした国家体制を築いた。しかしながらそれは、成立の当初から周辺諸国に社会システムを輸出するような強国であったわけではないし、大海に浮かぶ孤島のように周囲から隔絶された国家であったわけでもない。王朝内で西にはスカンディナヴィア諸勢力、南西にはビザンツ帝国（16世紀以降はオスマントルコ）、南東にはイスラーム諸国、東にはモンゴル帝国そしてその後継諸国家が生成し独自の文化を築いていた。ロシア国家はこれらの諸権力と無関係であったわけではなく、政治、経済、社会、文化の各側面においてさまざまなレベルでの交渉を重ねていた。「北西ユーラシア世界」とは、ただスラブ人がスラブ言語を用いるロシア国家のみが存在を主張する空間ではなく、バルト海や黒海のような海域から遡行する河川と都市間をつなぐステップというネットワークを背景に、多様な言語、ひと、もの、情報がゆきかう、ロシアとその周辺諸力の織りなす重層的な歴史空間である。本報告書に収められた各論文は、その諸相を具体的な歴史史料に基づいて明らかにしようとするものである。

* * * * *

本論集の寄稿者はいずれもロシアの専門家ではない（寄稿者によってはロシア語を駆使できる）。そのような寄稿者に対し、企画者は二つの条件を提示した。ひとつは寄稿者の専門とする地域とロシアとの関係に触れることであり、もうひとつはかならず議論の中核となる歴史史料がどのようなものであるのか説明を加えることである。ここではかりに前者を社会科学的側面を持つ「越境研究」と、後者を人文科学的側面を持つ「史料研究」と呼んでおきたい。

「越境研究」と呼び習わされる特別な研究手法があるわけではない。ここで私が意図しているのは、自身の専門分野だけではなく、ロシア史側の事情も考慮しながら、両地域の関係を明らかにすることである。歴史学の現状は基本的に一国史研究である。多くの批判があるにもかかわらず、現在の国境線を越えて研究をすすめる研究者は多くない。それはもちろん語学的な問題もあるが、一步国境線を越えれば、研究作法が大きく異なることが障壁となっているからである。たとえばドイツ史とフランス史など、モンゴル帝国史家にしてみれば、いずれも共通要素の多いヨーロッパの一部をなす国であり、言語を除いて一体何が違うのかと思われるかもしれない。それはもつともな意見であるが、現実に

は、フランスの学会とドイツの学会の自国に対する関心の持ち方とその分析の作法は大きく異なっている。それは国単位で培われた近代歴史学のあり方そのものの差であるといつてよいかもしれない。本論集では、各寄稿者が自身が専門とする研究分野に内在する独自のヒストリオグラフィと研究作法を越えて、寄稿者にとって未知の「ロシア」に分け入ることを試みている。

他方の柱は「史料研究」である。わたしたちは歴史家である以上、常に史料から出発し、議論を建てることになる。そのような史料の重要性に対する認識は、近年、とりわけヨーロッパ史学の世界で史料論というあたらしい研究分野を生み出すことになった。史料論は単なる史料の解説ではない。従来の史料研究は、それがいつ、どこで、誰によって成立したのか、そこに書かれている内容は真か偽かを問うものであった。もちろんこのような史料のアイデンティティを確定する基礎的事実に対する接近は第一義的なものであり、今後ともそのようなアプローチが廃れることはないだろう。しかしながら近年の史料論は、従来の史料研究で得られた基礎的事実を出発点とした上で、史料をひとつの「もの」として理解し、その史料の生成プロセスに関心を向けると同時に、その史料がなぜ生み出されたのか、ある特定の歴史空間の中でどのように機能したのか、そしてなぜ現在にいたるまで残ったのかといった側面に目を向けるものである。それ自体が一個の「もの」である史料そのものに問いかけることによって、史料が内在する問題とそこから引き出しうる可能性に注目する手法といえる。

「越境研究」にせよ「史料研究」にせよ、その根底には、自分の専攻する地域や時代を、他の地域や時代との相同性と相違性で考えるという比較思考がある。歴史学における比較の重要性は、かのマルク・ブロックが『比較史の方法』で説き、フランスの農村構造の違いを浮き彫りとした『フランス農村史の基本性格』やロイヤルタッチとよばれる療癒を治癒する王の能力の英仏比較をおこなった『奇跡をおこなう王』で実践したところである。国家であれ地域であれ都市であれ、二つ以上のものを比較することによって、比較対象が内包する一般性と特殊性を抽出し、わたしたちの世界に対する社会科学的認識を進展させることが可能となることは、いまさら私が繰り返すまでもない。しかしながら本報告書の狙いは、通常の比較研究がそうであるように、各地域間の事例や史料を単純に比較することで終わらせることなく、ロシアという媒介を用いることによって、有機的につなげることにある。

* * * * *

本報告書は、特別原稿と地域別の4つのセクションで構成されている。特別原稿では、「アラビア語史料に記録された北西ユーラシア世界」と題した報告を家島彦一氏に頂戴している。イスラーム商業史を専門とする家島氏の膨大かつ精緻な御業績を知らない研究者はいないだろうが、彼は先だって平凡社の東洋文庫より、十世紀アッバース朝の外交使節イブン・ファドラーンによる旅行記録『報告書』の訳注を上梓した。この『報告書』が、前近代の北西ユーラシア世界を知るための最も重要な史料のひとつであることはイスラーム史の専門家の中で知られてきたが、今回の訳注の刊行により、イスラーム史以外の、そして前近代史以外の研究者も、その内容に容易にアクセスできるようになった。これは画期的な学問の進歩であり、今後、わたしたち日本人研究者は、世界中に散逸する写本の調査に基づく家島版『報告書』をもちいて、前近代北西ユーラシア世界について新しい知見を付け加えていくことになるだろう。

ロシアを取り巻く4つの文化圏に区分された4つのセクションは、それぞれ二本の実証論文とそれぞれに対するコメントでひとくみをなす。第1部「中央アジアの視点」は、赤坂恒明氏がジュチ裔政権の系譜史料を、川口琢司氏と長峰博之氏が15世紀書簡史料を題材に論文にしたため、近代イスラーム世界の写本史料に精通する堀川徹氏がコメントをおこなう。第2セッション「イスラーム世界の視点」は、小笠原弘幸氏が17世紀以前のオスマン帝国の叙述史料を、磯貝健一氏が20世紀のロシア帝国統治下サマルカンドの裁判資料に基づく論文を提出し、17・18世紀ロシアの宗教行政史を専攻されている濱本真実氏がコメントを付す。第3セッション「スカンディナヴィアの視点」は、小澤がヴァイキング時代北欧に特有のルーン石碑を、成川岳大氏が中世後期のフィンランドとロシアに関わる諸史料を用いた論文を執筆し、中世ロシア社会経済史の専門家である細川滋氏がコメントを担当する。第4セッション「ビザンツ帝国の視点」は、草生久嗣氏がビザンツ叙述史料に見えるペチェネグという用語を、橋川裕之氏が黒山のニコンとよばれる人物による写本の行方を題材とする論文を担当し、中世ロシア宗教史を専攻する宮野裕氏がコメントをおこなう。

以上の論文寄稿者とコメンテータは無作為に組み合わせたわけではない。寄稿者はロシア周辺地域の専門家に、コメンテータはロシア史やロシアの歴史史料に通暁している専門家をお願いした。挑発的な言い方をすれば、ロシア外部の専門家が提起する問題に

対し、ロシアの専門家がむかえうつというかたちになる。本論集のもととなったシンポジウムでは、お互いの研究成果を参照することすらほとんどない中央アジア史、イスラーム史、西洋中世史、ビザンツ史、ロシア史の専門家がひとつのテーブルで向かい合い、意見を交わすという稀有な場の提供が可能となった。そしてそれぞれの専門知を持つ参加者が、国家や地域、それぞれに独自に培われてきたディシプリンを越えて、越境研究と史料研究という二つの軸にそって「北西ユーラシア歴史空間」の再構築を模索し、その再構築のプロセスはいまなお継続中である。本報告書が北西ユーラシア世界のあり方を歴史学的に再考する一助となれば幸いである。

